

随想

古文書と暴瀉病

服部 瑛* 服部 友保*

Key words

古文書, 暴瀉病, 天王様

はじめに

古文書を読むと当時の息遣いや思いが漂ってきて楽しい。ときには思いがけない事実を知って嬉しくなるときもある。日本人は記録することの好きな人種らしく¹⁾、ことに江戸時代の古文書は無数といっていいほど残されているのだが、それらは誰かが読まないとい貴重なものであっても埋もれて沈潜してしまう。とくに医学に関するものは、医療関係者が解読しなければならない。今回の試みは暴瀉病という病気に出会って、古文書の内容を現代に戻す作業を行ったのだが、同時に人物の顕彰につながればと思いながら作業を進めた。私の拙い古文書解読の旅にお付き合い願いたい。

医師 上原元伯

数年前、群馬県の歴史学の重鎮でいらっしゃる松島榮治先生²⁾が、「とにかくこれを調べてもらなさい」と上州前橋の医師 上原家の蔵書目録を持ってきてくださった。教わるのではなく古文書の解読を実践しなさいというご指示なのだろうと考えて、その中から偶然に『暴瀉病二付』を捜し出して手に取ってみた^{3, 4)}。これが実に印象に残る出会いとなった。

暴瀉病とはコレラのことで、江戸安政時代にも大流行した。前橋元総社医師 上原元伯はそのコレラの惨状に接し、その病状を詳しく報告した。さらに、多くの漢方医書にあたって調べたのだが埒

の明かないことを知って、当時としては珍しいドイツの医書からこの病気をみつけ、治療を紹介、工夫したのである。この古文書からコレラというとんでもない病気の記録を後世に残そうとする元伯の熱意を感じて感銘を受けたのだが、それはまさに時の隔たりを忘れて元伯と対峙、教授されている気分させられた。

安政時代のコレラの流行は本当かしらと手元にある『高橋景作日記』⁵⁾を調べてみると、「安政五年九月三日暴瀉病江戸大流行ニ付御老中様々芳香散ト云葉方其外予防、手当御書付此辺迄御触アリ」とあるではないか。早速群馬県立文書館で調べてみると、当時の幕府からの「触れ」が5通みつかった。と同時に『安政記聞』という雑誌の中に多くのコレラの記事を見つけたのである。

暴瀉病(コレラ)

暴瀉病は、嘔吐、下痢を主症状とする感染症で、致死率が高いことは周知である。『安政記聞』では、安政5年8月に江戸で大流行して、数万人あるいは20余万人の死者があったと記載されている。この点に関して、インターネット上のウィキペディアをみると「安政5年における流行では九州から始まって東海道を及んだものの、箱根を越えて江戸に達することはなかったという文献が多い一方、江戸だけで十万人という文献も存在するが、後者の死者数については信憑性に欠くという説もあ

* Hattori, Akira (理事長) / Hattori, Tomoyasu (院長) 医療法人はっとり皮膚科医院 (〒370-0071 高崎市小八木町2027-4)

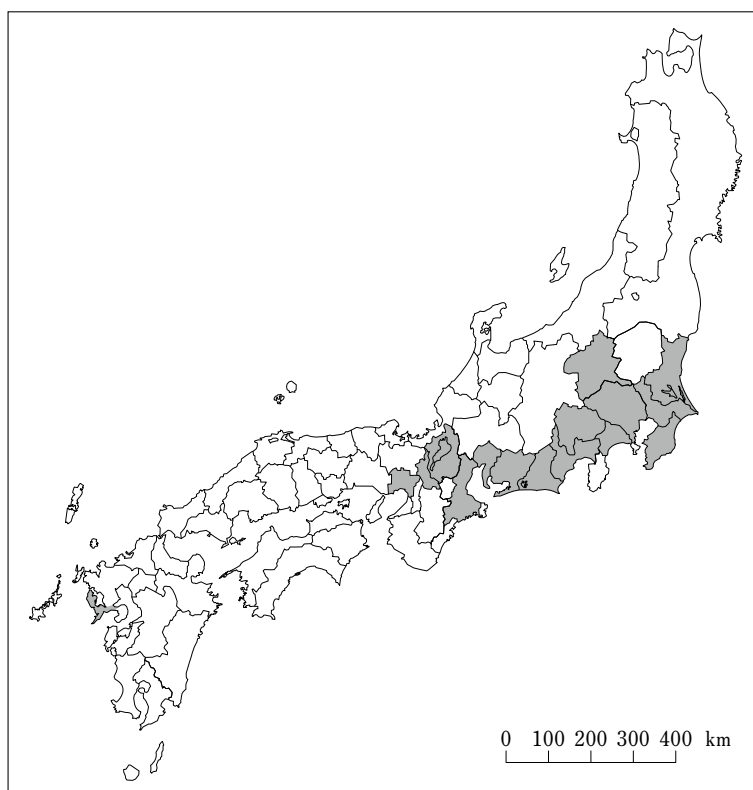


図1 確定された安政5～6年のコレラ感染分布図。長崎は出島である。各地の古文書から山陽、四国などで新たな感染地域が確認されたと考えられる。

る」といくぶん否定的に書かれている。ここでいう文献の範囲がよくわからないが、実証する古文書が多数あるのだから、むしろ江戸でも大流行があったとすべきであろう。

感染地域は、長崎から始まって、京大阪、東海道筋から江戸、さらに上総、下総、武州、上州高崎、伊勢崎まで及んだと記されている。具体的には、「コレラによる葬儀が、江戸浅草御門通りでは8月4日116、8月8日120も通り、また、8月7日水道橋での朝から夕方4時までの葬儀が32通った」と書かれていた。

ちなみに将軍徳川家定はコレラで死んだという俗説があるが、『安政記聞』によると、政治的にその死が伏せられ公的にはコレラの流行している8月8日死亡となっているが、実際は「実ハ七月五日

薨御ノ由」(これだけ朱書)なのでコレラの死亡ではなさそうである。むしろ薩摩藩主島津斉彬が、「薩州侯も来府途中ニテ卒去被成候」で、コレラで死亡したという風聞があった。

病名は、暴瀉病、冷徹疫あるいは三日ころり、イギリスではコレラと呼んでいるというのだが、当時医学の主流だった漢医は、この病気をまったく知らなかったらしい。蘭医はおおむね知っていたのか、『安政記聞』ではこの病気は蘭医に受診するように薦めている。これだけの診断力の差を考えると、このコレラの大流行を境にして蘭医学は民間にも大いに認知されたのかもしれない。

不思議なことは、元伯の書でも、「触れ」にしても、あるいは『安政記聞』を読んでみても、当時の人たちはコレラが流行するということは十分に認

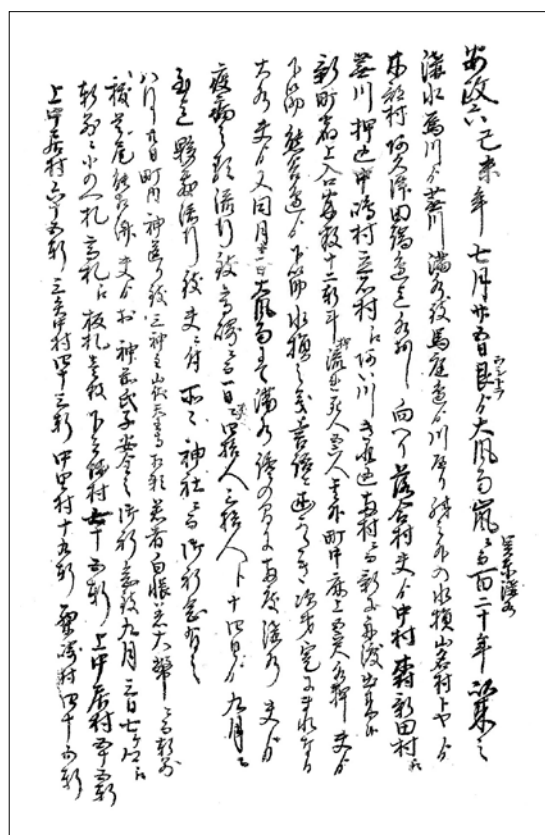


図2 倉賀野神社の『納戸日記』。安政6年8月ごろのもの、コレラの発生直前の大水害も記されている。

知しているのだが、感染(伝染)することは知らなかった、ということである。文章の中で一切「この病気はうつる」とか「隔離しなさい」といった予防法が見当たらないのである。

一方、立川昭二⁶⁾は、橋本伯寿という医師の『断毒論』⁷⁾を引用して、当時疫病が伝染することを知っていて、具体的に「ふさという妊婦は麻疹を避けて各地を逃げ回って無事出産」した例をあげている。最初はなるほどと思っていたが、よく考えてみると、もし当時感染が認知されていたならば、幕府からの「触れ」にそのことを第一に教えるだろうし、コレラ渦中にあった多くの人たちも同じように逃げ回っていたはずだと思直した。杉本鉞子の『武士の娘』⁸⁾を読むと、「御維新前から悲哀の打ち続いた後、母は喘息に悩まされておりま

した。私ども一家のものはこれが前世の罪業によるものだと思いきっておりました」という記載を見ると、むしろ当時病気は神(疫神、悪霊など)にすべてを委ねていたと考えるほうが合理的なような気がしてならない。

倉賀野神社の『納戸日記』

そうこうするうちに、高崎倉賀野神社の『納戸日記』にコレラの記事があることを知った。嬉しいことに神主の高木直明氏は快くその古文書を見せてくださり、懇切丁寧にご指導までしてくださった。前述したように、安政5年のコレラの流行は、江戸で大流行したが、その他甲州にも及んでいたようで、『安政記聞』と合わせた感染分布図(図1)を示すが、これをみるとコレラは海運、ことに瀬戸内海、太平洋海路による感染ルートが疑われた。

具体的に記された日付をみると、長崎出島が「安政五年七月十三日」、京都が「八月最初」、江戸が「八月朔日」と記載されているから、長崎から江戸まで2週間余りで蔓延するというスピードを知って驚いたのだが、長崎から瀬戸内海を通して大阪、あるいはそのまま太平洋を通して江戸などの海運を考慮すると可能な日数と考えられる。さらにコレラ患者は舟に温存されるので一挙に江戸まで伝染可能となるのではなかろうか。もちろん陸路の感染も考慮しなければならず、各地の古文書から山陽、四国などで新たな感染地域が見つかるはずである。

安政5年の上州でのコレラの流行は江戸と異なり軽微だったが、翌年安政6年夏に猛威をふるった。前橋元総社が安政6年8月12日、高崎が8月14日なので2日で前橋から高崎に蔓延したことがわかる。前述の幕府からの「触れ」は、『安政記聞』でも詳しく書写され、千葉県でもいくつもみつかった。相当緻密に配布されたようで、また風聞などで多くの人たちはコレラのことには十分に知っていたはずなのだが、為す術もなく大流行になってしまった。この驚きは如何ばかりであったろうか。

当時病因などわかるはずもないのだが、『納戸

日記』では「総而水邊ノ場所多死ス」とあり、当時の倉賀野神社神主高木出雲(5代前)のするどい着眼点を知って驚いた。これを遡ること4年ほど前(1854年)に、ロンドン在住の医師 ジョン・スノーが、市の中心部の一地区で発生したコレラのもとをたどると、すべてひとつの汚染された飲料水の水源に行き着くことを見事に証明したのだが、その説は、ヨーロッパ中の権威ある高名な医学者によって決定的に否定され、1880年(明治13年)代の「細菌」の発見まで待たねばならなかったという⁹⁾。

疫病における神事

吉村昭の小説『桜田門外ノ変』¹⁰⁾の中から、水戸でも安政6年にコレラの流行があって「この疫病がひろがらぬよう、上町でも下町でも神社から神輿をかつぎ出して家並の間を縫ってすすみ、疫病退散を祈祷した」ことを知った。そしてやはり倉賀野神社でもまったく同じ神事が行われていたのである。『納戸日記』には「獅子舞が先導して神主、山伏、白丁を着た若者三十人が宿内を巡行し、疫病退散を祈祷した」ことが詳細に記載されていた。安政5年では、江戸での大流行を知っての神事で「其後ハ病患退散致安穩ニ相成候」と喜んだのだが、安政6年にまさかの大流行、そのためか新たに「天王守」が加わった。天王とは牛頭天王を指すと考えられる。牛頭天王は、元インドの祇園精舎の守護神で、除疫神、つまり疫病除けの神様とされる。『納戸日記』では、ごく短く「高崎ニテ一日死人四拾人三拾人ト十四日ハ九月ニ至迄夥敷流行致」しか記載されていない(図2)が、むしろ短文であることのほうが被害の大きさを伝えてくれるような気がする。実は、このコレラ流行の時期に一致して7月25日と8月16日2回の未曾有な大水害があった。水害で痛めつけられ、8月14日からはコレラの大流行で高崎は壊滅的な被害があったはずだが、だからこそ事実ほとんど語られる余裕などなかったのではなからうか。一方、千葉県文書館でみつけた千葉県富津の名主の『午壺番日記』でもコレラの流行を目の当たりにして、個人的にも頻回に神社巡りを行っていたことを知った。



図3 紙垂を飾った天王様。毎年7月下旬、150年以上前より祭りが行われている。

このことから当時は、病気は神のなせる業で、だから神に祈れば病気は退散すると信じきっていたというしかない。「疫病は流行するが、感染することは夢にも思わない」ことは当たり前のことだったのである。信じられないことだが、当時の人たちにとって疫病は神から与えられるもので、神輿や獅子をかついで祈ることで病気退散ができると本当に考えていた。もちろんそれで疫病を防ぐことはできない。それでも不幸に見舞われたら、神の御心のままに仕方のないことだと思っていたにちがいない。

阿久津の天王様

このことを倉賀野町の対岸(阿久津町)に住む私の医院のスタッフに話したら「婆さんに聞いた話ですが、150年以上前に大水害と疫病があって、それを鎮めるために天王様を祀って今でも毎年7月にお祭りをやっています」と教えてくれた(図3)。まさにこれが『納戸日記』に記載された水害とコレラなのである。安政6年に高崎では大災厄があり、阿久津という小さな村ではとくに被害が大きかった。そして150年以上もの間毎年天王様を祀ってきたのである。それはもちろん死者への鎮魂と、大災厄を後世に語り継ぐといった目的もあったと思うが、そこには私たちが忘れかけている神に対する敬虔な祈りが連綿と続いているように思わず感動してしまった。

おわりに

古く日本は「豊葦原瑞穂国」と呼ばれ、太陽と水の自然の恵みに満ちた、豊かで瑞々しい稲穂が稔る国とされた。しかし一方では、地震や火山噴火、洪水や早魃あるいは疫病などさまざまな災厄にも見舞われてきた。そうした中でことに農耕共同体の社会では、災厄を克服するために神に祈るという行為が生まれ、神社と神道が完成していったとされる¹¹⁾。奈良時代の記録書『続日本紀』には多くの災厄が記録されているが、疫病は聖武天皇時代の「疫気」から痘瘡の激しい流行の後「疫神」に格上げされて畏怖される対象となった¹²⁾、と考えられる。それから一千年以上、おそらく明治時代に入るまで延々と疫神への畏怖の思いが続いてきたのではなかろうか。コッホやパスツールによって病原体がみつかるまで、ことに日本では、神は絶対・絶大だった。この畏れを十分に理解しなければ先人の歩みは語れないように思われてならない。

今回意外な話題を提供して恐縮しているが、『皮膚病診療』ではこうした皮膚科を離れた話題も、と思って書いた。暴瀉病に関して上原元伯の書には「赤斑ヲ発スルモアリ」とあるので、あながち皮膚科も無縁ではないことを追記して本稿を終えた

い。

今回の古文書は、群馬県立文書館、高崎倉賀野神社、千葉県文書館のものである。解説にあたって、群馬県立文書館 秋山正典氏にご指導いただいた。ここに深謝します。

<註と文献>

- 1) ドナルドキーン：百代の過客，講談社学術文庫，2011
- 2) 群馬県の数々の要職を歴任され、現在は群馬県文化財保護審議会会長などを務めておられる。
- 3) 服部 瑛：暴瀉病について(1)，群馬県医師会報，**799**：38，2015
- 4) 服部 瑛：暴瀉病について(2)，群馬県医師会報，**800**：39，2015
- 5) 金井幸佐久，高橋忠夫：高橋景作日記，高橋景作日記刊行会，1995
高橋景作は上州吾妻郡の医師で、高野長英「大観堂」の塾頭を勤めるほどの俊英だった。後に脱獄した高野長英を匿ったとされている。
- 6) 立川昭二：近世病草紙，平凡社，1979
- 7) 橋本伯寿の意見はまさに卓見なのだが認知されなかった。香西富子は、日本医史学雑誌，**55**：499，2009の中でその政治的背景について考察している。
- 8) 杉本鉦子，大岩美代訳：武士の娘，ちくま文庫，1994
- 9) ウィリアム・H・マクニール，佐々木昭夫訳：疫病の世界史(上)，中公文庫，2014
- 10) 吉村 昭：桜田門外ノ変，新潮文庫，2010
- 11) 岡田莊司：サライ，**593**：24，2014
- 12) 宇治谷孟：続日本紀，講談社学術文庫，1995